

有料老人ホーム 実践研究発表会プログラム

10:00 開場

開会式

10:30 開会式
開会挨拶
オリエンテーション

日本老人福祉財団 理事長 青木 雅人

<午前の部>

| No. | 10:55 | 第1グループ 座長：藤沢エデンの園二番館 ケアサービス課 課長代行 橋本 揚水 | 頁 |
|-----|-------|--|---|
| 1 | | たかが爪、されど爪～足の爪の重要性を知ろう！私たちがサポートします！～ 湯河原〈ゆうゆうの里〉診療所 齊藤 美樹 | 4 |
| 2 | | 健康の秘訣は毎日の歯磨きから～自立支援に向けた取り組み～ 宝塚エデンの園 一般居室ケアサービス課 藪内 加代子 | 5 |
| 3 | | 今でしょ！住み替えハッピー大作戦！～プロセスを重要視した住み替え提案～ 京都〈ゆうゆうの里〉ケアサービス課 計画作成担当者 中川 リノ | 6 |
| 4 | | 奈良ニッセイエデンの園入居者の健康寿命に関する30年間の振り返り調査について ニッセイ聖隷クリニック 医療技術事務課 酒井 美智子 | 7 |

| No. | 11:40 | 第2グループ 座長：浜松〈ゆうゆうの里〉生活サービス課 課長 高橋 徹 | 頁 |
|-----|-------|---|----|
| 5 | | いつまでも自分らしく健康で 第2報～喫食率と基本チェックリストの相関分析～ 油壺エデンの園 居室サービス課 森 智美 | 8 |
| 6 | | スマホ難民にはさせません！ 伊豆高原〈ゆうゆうの里〉生活サービス課コミュニティ 谷口 佐代子 | 9 |
| 7 | | ようこそ松山エデンの園へ～介護居室直接入居受入れの取り組み～ 松山エデンの園 ケアサービス課 磯崎 啓太 | 10 |
| 8 | | ヒヤリに対する意識を変える～ヒヤリは「ありがとう」～ 神戸〈ゆうゆうの里〉事務管理課 募集担当 丸川 美矢子 | 11 |
| 9 | | ピンチを経験して Teppan を知る～コロナ禍を経験して見えたこと～ 浦安エデンの園 入居者募集センター 田代 美和子 | 12 |

12:30 昼食・休憩 (60分)



<午後の部>

| No. | 13:30 | 第3グループ 座長：浦安エデンの園 ケアサービス課 課長補佐 中澤 麻利 | 頁 |
|-----|-------|--|----|
| 10 | | コロナ禍におけるテレワークの実用性について 藤沢エデンの園一番館 運営管理課 古野 里枝 | 13 |
| 11 | | すっきり見やすい職場環境を目指そう～写真と表を見て時間短縮への道へ～ 浜松〈ゆうゆうの里〉食事サービス課 齋藤 達哉 | 14 |
| 12 | | 朝食時における配膳ミスの改善 松戸ニッセイエデンの園 食事サービス課 安原 庸司 | 15 |
| 13 | | 検食の質を向上させるために～検食の役割・対応の見える化～ 横浜エデンの園 サービス向上委員会 大西 栄幸 | 16 |
| 14 | | 大阪〈ゆうゆうの里〉食事総選挙～入居者が選ぶ、No.1メニューとは？～ 大阪〈ゆうゆうの里〉食事サービス課 宅見 真弓 | 17 |

| No. | 14:20 | 第4グループ 座長：大阪〈ゆうゆうの里〉生活サービス課 課長 藤井 美紀 | 頁 |
|-----|-------|---|----|
| 15 | | 穏やかに過ごせる時間の実現 明日見らいふ南大沢 居室サービス課 川上 祐介 | 18 |
| 16 | | 認知症勉強会～入居者と一緒に学んで行く～ 湯河原〈ゆうゆうの里〉生活サービス課コミュニティ 宇留野 勝彦 | 19 |
| 17 | | 音楽療法を用いたリラクゼーション 浜名湖エデンの園 ケアサービス課 大屋 敦史 | 20 |
| 18 | | 看取りケアに際して～現場の介護職員ができること～ 佐倉〈ゆうゆうの里〉ケアサービス課 新田 歩惟 | 21 |

15:05 休憩 (10分)

| 15:15 特別講演 | | | |
|------------|--|--|----|
| | | 「コロナ禍で高齢者に及んだ影響と最新のフレイル対策」 筑波大学 人間系 教授 山田 実 | 22 |
| | | 「日常生活の歩行計測による高齢者の自立支援サービス」 みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社 調査役 渥美 智之／調査役 福島 遼 | 23 |

| 16:05 結果発表・表彰式・閉会式 | | | |
|--------------------|--|--------------------|-------------------------|
| | | 結果発表 表彰 閉会挨拶 | 聖隷福祉事業団 高齢者公益事業部長 平川 健二 |

16:30 終了

たかが爪、されど爪

～足の爪の重要性を知ろう！私たちがサポートします！～

湯河原〈ゆうゆうの里〉診療所

○齊藤美樹／久能木陽子

■目的

足の爪のケアを日頃から心掛けている人は少なく、実際入院をきっかけに清潔行為を行うと水虫、爪白癬、巻き爪、爪の肥厚といったトラブルを抱えている方が多く、十分なケアを行えていないのが現状であった。たかが爪と思われがちだが、これまでの研究などで足の爪の状態により転倒や歩行障害を予防できると言われてきた。そこで入居者に足の爪の重要性を知ってもらい、爪切りのサポートやセルフケアのアドバイスを行うことで足の爪への意識向上に繋げ、転倒や歩行障害の予防になればと思い取り組むことにした。

■方法

取組期間：2022年4～10月

仮説：足の爪のケアについての認識不足や爪切りが大変と感じ十分なケアが行えていない。サポートすることで爪の重要性を認識し転倒や歩行障害の予防に繋がるのではないか。

- ①外来受診者を対象にアンケート調査を実施し現状把握
- ②爪の重要性、セルフケアのポイントをパンフレットにし配布
- ③爪切りの実施
- ④取り組み後どのような意識変化があったのか聞き取り調査

倫理的配慮：アンケートと聞き取り調査は個人が特定されないよう配慮している。

■結果

アンケートで爪切りを大変と感じている人は66.6%いるがそれでも自分で切っている人が多かった。また診療所で爪切りのサポートをしていることを知っている人は16.6%しかおらず、爪切りをすると「こんなことまでしてくれるなんてありがたい。」「目が見づらくなって苦勞してたから助かったよ。」との言葉が聞かれた。足の爪の状態により転倒や歩行障害の予防になることの認知度は33.4%と低かった。足の爪の手入れをしている人は半数いたがほとんどの人がトラブルを抱えていた。パンフレットを作成したことで爪の重要性や自分の爪の状態を把握し手入れの見直しに繋がった。また爪への関心が高まり問い合わせが多くなった。

■考察

仮説の通り年齢を重ねるごとに爪切りを大変と感じ足のケアも十分にできない状態であった。しかし、それをどこに相談していいのかわからず困っていたが、取り組みを通し診療所でサポートしていることがわかり解決の糸口が見つかり第一歩が踏み出せたと考える。

■結論

トラブルを抱えた爪はすぐに治るものではなく長い月日をかけて治療・ケアが必要となる。そうならないためにも日頃から爪のケアを心掛け、早期対応をすることが重要である。今回、爪への関心が高まったが転倒や歩行障害の予防とまでは至っていないため引き続きサポートしていきたい。



健康の秘訣は毎日の歯磨きから ～自立支援に向けた取り組み～

宝塚エデンの園 一般居室ケアサービス課

○藪内加代子／山本真樹

■はじめに

コロナ禍でマスクの着用が日常化し、物忘れのある入居者のマスクの汚れや、口臭が目立つようになり、きちんと口腔ケアができていないのか疑問に思った。日々、介護予防活動を実施しているが、個別性のある口腔ケアの取り組みにより、口腔内環境の改善が図られるのではないかと考えた。更に、自立支援の観点から、自分自身で口腔内の清潔保持ができることを目指した。

■目的

物忘れの症状のある入居者が、毎日自分で口腔ケアを行える。

■方法

- ・データ収集方法
対象：介護保険契約者3名 期間：2022年4月～2022年10月まで
①口腔アセスメント表を作成。対象入居者の口腔ケア状況を把握する。
②歯科医が口腔チェックを実施した。
③個々に合わせた口腔ケアを検討し、実践と評価を行った。
- ・倫理的配慮
個人が特定されないよう配慮し、対象者と身元引受人に書面にて同意を得た。

■結果

事例① A氏

全体的に磨き残しがあったため、口腔ケアの声掛けと見守りを実施した。その結果、声掛けのみで磨くことができ、口腔内の磨き残しが改善した。

事例② B氏

歯間に磨き残しがあったため、口腔ケアの方法についてポスターを貼り、口腔ケアの声掛けと見守りを実施した。職員が声掛けをする前に、口腔ケアをしていることが増えた。その結果、口腔ケアの声掛けと見守りを行わなくても、歯間の磨き残しが改善した。

事例③ C氏

定期的に歯科医によるメンテナンスを実施しているが、全体的に磨き残しがあった。口腔ケアの方法についてポスターを貼り、声掛けと見守りを行った。その結果、職員の声掛けとポスターを見ながら口腔ケアができるようになり、口腔内の磨き残しが改善した。

■考察

口腔内環境の詳細なアセスメントを実施し、歯科医の助言を取り入れることで、個々にあった口腔ケアを行うことができたと考える。また、職員が毎日関わることで、入居者が安心でき、口腔ケアの習慣化につながったと考える。

今でしょ！住み替えハッピー大作戦！ ～プロセスを重要視した住み替え提案～

京都〈ゆうゆうの里〉ケアサービス課 計画作成担当者
○中川リノ／木村真知子／上田佐智子

■はじめに

京都〈ゆうゆうの里〉は敷地面積 11 万㎡（約東京ドーム 2 個分）、傾斜地に建設され、自立されているときは、テラス型住居（5 棟）及びマンション型住居（2 棟）にて充実した生活を、介護を要するときは、ケアセンター（1 棟）へ住み替えて安心した生活を過ごすことのできる施設である。

■目的

住み替えについて、入居者の中にはマイナスイメージを持っている人もおり、できれば行きたくないとの声を聞くことが多かった。私たちは、できる限りリロケーションダメージを軽減し、住み替え後もその人らしく生活してほしいと考える。空室が発生してから入居者に声をかけるのではなく、日頃からの関わりの中で工夫できないかと考え、「住み替えまでのプロセスを重要視していくことで、入居者の不安を少しでも軽減できるのではないか」と仮説をたてて取り組むこととした。

■方法

取り組み期間：2020 年 4 月～現在

- ・ケアセンターを入居者に実際に見てもらおう機会をつくる。
- ・心の準備・引っ越しの準備・親族の合意の 3 点に注力する。
- ・入居者の意向や状態を把握し計画作成担当者間で意見交換。多職種で共有・検討。
- ・希望者の把握を行い、意向や身体状況に合わせた提案ができるようにする。

倫理的配慮：事例では匿名での紹介とし、個人が特定されないように配慮した。

■結果

プロセスを重要視したことで、入居者より「あらかじめ話を聞いていたのでイメージができ、不安なく決断できた」「実際の部屋を見たり話を聞いて、まだまだこれから！と思えた」等の言葉ももらった。一方で、自立の状態から突発的な体調変化で思わぬ住み替えとなった人にはプロセスをふむ期間が不十分だった。ニーズや不安に感じる点は様々であり、捉え方も様々であることがわかった。

■考察

入居者の考えは様々だ。その気持ちに寄り添いながら一緒に考えていくことが重要だと再確認した。住み替えはいろいろなケースがある。どんな時も私達がぶれずに、その方の住み替え後の生活をイメージし適切に支援を組み入れることが大切だと痛感した。そして、多職種連携し、絶対にハッピーな生活を！と同じ方向を向き取り組むことが、安心感やリロケーションダメージの軽減につながったと考える。

■結論

高齢となり特に認知力低下がある人が環境を変えるということはリスクも伴う。だからこそ、プロセスをふみ準備して行くことは重要だとわかった。そして、このプロセスをふむ期間やタイミングについては再検討をしていく。今回の課題を踏まえ PDCA をまわしながら発展させていきたい。京都〈ゆうゆうの里〉という大きな家の中で、状態に合った場所や環境で適切に支援を入れ、最期の時までその人らしく生活してもらえよう努める。



奈良ニッセイエデンの園入居者の健康寿命 に関する 30 年間の振り返り調査について

ニッセイ聖隷クリニック 医療技術事務課

○酒井美智子／南 祐三／高田静枝

■はじめに

奈良ニッセイエデンの園は、ひとりひとりを尊重し、「健康」「生きがい」「安心」を支援し続け、より良い QOL の保証を目的としている。入居者の死亡原因や健康寿命の調査は、今後の健康寿命の延伸に資すると考えた。

■目的

奈良ニッセイエデンの園入居者の死因分析や介護認定状況等をもとに「日常生活動作が自立している期間の平均」（以下、健康寿命）を算出し、園の健康寿命の傾向や地域社会との比較を行い今後のサービスに繋げる。

■方法

1992 年 4 月 7 日～2022 年 3 月 31 日までに死亡した奈良ニッセイエデンの園入居者 595 名を対象とした。調査方法は、ETS システムやニッセイ聖隷クリニック医事システム、医事課保管資料より、介護保険認定状況、入院期間、死亡原因病名や発症から死亡までの期間等の情報を収集した。生存期間を健康な期間と不健康な期間（要介護 2 以上）に分け、平均自立期間を求め健康寿命を算出した。個人が特定されないよう倫理的配慮を行った。

■結果

対象とした 595 名（男性 237 名・女性 358 名）の入居期間は、最短 1 日～最長 29.8 年だった。死亡場所は、当クリニック 63%、園外医療機関 15%、介護居室 18%、一般居室 3%、その他 1% で、死亡原因は 1 位肺炎、2 位悪性新生物、3 位心疾患、4 位老衰だった。介護保険開始後に健康寿命を算出できたのは 454 名で、うち 112 名（男性 58 名、女性 54 名）は介護認定を取得していなかった。死亡原因病名や死亡場所で健康寿命や不健康な期間に差がみられたものの、入居者の健康寿命は 21 年間で男性 12.02 年、女性 8.95 年延伸した。2019 年の入居者の健康寿命は、全国平均と比べて男性は 4.89 年、女性は 4.64 年長かった。

■考察

今回の調査で、2010 年以降介護居室での死亡者数が増えていたが、在宅支援診療所の開設や看取り介護の影響があったと考える。健康寿命調査では、介護居室の死亡者は健康寿命と不健康な期間が共に長く、介護度が高い状況を反映していた。入居者女性は、健康寿命の増加分が平均寿命の増加分を下回り、不健康な期間の拡大がみられた。いかに短縮するかが今後の課題である。死亡原因病名中、肺炎が 1 位だったが、2 位以下の疾患に比べ予防可能な疾患でもある。口腔ケアや栄養管理など口腔機能維持のためのケアが重点的に始まった 2014 年以降の肺炎による死亡者の減少は、スタッフらの地道な努力の成果と評価できる。

■結論

入居者の健康寿命は男女とも経年的に延伸し、エデン版地域包括ケアシステムの有効性の表れである。厚生労働省の統計で高齢者肺炎の 7 割以上は誤嚥性肺炎であり、当園の肺炎死亡者数の減少は、誤嚥の低減を目的に活動したスタッフらによる誤嚥予防対策が奏功した結果と考えたい。平均寿命の増加分を上回る健康寿命の増加が果たせるよう今後も期待したい。

いつまでも自分らしく健康で 第2報 ～喫食率と基本チェックリストの相関分析～

油壺エデンの園 居室サービス課

○森 智美／佐々木美江

■はじめに

居室サービス課では2021年度から園内入居者の介護に関する研究を継続している。先行研究で園内入居者の健康寿命、超後期高齢者の自立度が地域と比べ高いことが明らかになり、園のサービスの根幹であるトータルヘルスケアが、フレイル予防の柱、食事・社会性・運動を支えていると考察した。

■目的

今回は入居者の契約状況等の基本情報で分析をしたが、個人のデータを掘り下げることにより具体的な分析研究ができると仮定し栄養に着目、入居者の食事申し込みの割合（以下喫食率）を算出して研究に用いた。喫食率が入居者の生活や健康状態に及ぼす影響を数値化することで今後の食事栄養に関する具体的な支援の方向性を見出すことを目的とした。

■方法

対象者：2015年から2021年（年1回提出）基本チェックリスト提出者。延べ2150人。

対象者の喫食率を1割以下から8割以上の5段階でグループに分け基本チェックリスト結果と照合、喫食率グループ毎に問題（介護予防の必要性）の有無を相関分析する。

・倫理的配慮

本研究におけるデータの使用は施設長の承諾を得ており個人を特定できないよう配慮した。

■結果

喫食率と相関のあった基本チェックリスト結果は「生活機能全般」と「閉じこもり」であった。該当項目を掘り下げると、喫食率が8割以上のグループでは、より問題が生じており、喫食率が1割以下のグループでは、問題に該当する割合は少なかった。

BMIで区分分けし、喫食率と比較すると、低体重に関しては喫食率における優位性が確認できなかったが、肥満傾向では喫食率が低いグループが該当する割合が高い。

■考察

食事を自身で用意することは、身体機能、献立を考える能力や複数のことを同時に行うデュアルタスク能力、購入時の計算等の認知機能を要し、フレイル予防を促進している。

閉じこもりの該当者は相対的に運動器にも問題が生じており、生活機能全般にも問題が生じる。喫食率の高さは、自分で食事の用意が困難となった結果ともとれる。

喫食率とBMIで比較した結果、園の食事摂取が多いグループの方が、標準体重に近いことから、栄養バランスの計算された食事が健康維持の一助になっている。

■結論

入居者が自身の体調や生活状況に合わせた食事選択ができることが重要と考える。園の食事申し込み啓発と並行し、自炊をしていて低体重や肥満傾向の方への栄養相談等の強化や、加齢や心身の変化で自炊が困難になる前に状態変化を把握し、買い物的手段や調理の工夫等を行い、より良い食事が継続できるよう各部署や委員会での連携強化が課題と考える。



スマホ難民にはさせません！

伊豆高原〈ゆうゆうの里〉生活サービス課コミュニティ
○谷口佐代子／大塚直義／酒井朋子／藤間裕子／谷澤いず美

■目的

昨今カウンター業務で、スマートフォン・携帯電話・タブレット（以下スマートフォン）の問い合わせが、増加傾向にあると感じた。実際に業務日報を見てみると、2020年度は1日1件以下程度であったが、2022年度では1日に3件程度の問い合わせがある。また、内容も、以前は具体的なアプリの使い方が主であったが、昨今では「電話に出られない」「メールができない」といった内容が増加している。これはキャリア3社が3Gのサービスを終了すると発表したことで、仕方なくスマートフォンを契約し、基本動作すら儘ならない状態になっていると考える。その方たちは「解約したい」「電話の音が怖い」などの訴えを聞く。そこで「スマホ難民にはさせません！」をスローガンに取り組みを開始した。

■方法

問題を洗い出すと、職員側では、入居者の端末の契約情報などを探ってから各々対応しており思ったより時間がかかる、などが挙げられた。
入居者側の視点ではショップが里から遠い。所持する恩恵がない、などが挙げられた。
入居者の端末情報は、電話番号、契約キャリア、機種、プラン、居室Wi-Fiの有無などを表にして、確認してから対応することで改善を図った。
問い合わせに来た入居者の同意を得て、スマートフォンに「ワクチン接種証明アプリ」など、また、お気に入りには「コミュニティブログ」などのショートカットを入れ、スマートフォンの利便性や必要性を感じてもらった。
倫理的配慮：端末情報の表の作成は、各入居者の同意を得て行っている。収集したデータは個人が特定できないように配慮した。

■結果

端末情報の表を見てから対応することで、対応の迅速性・正確性は増した。入居者からは、「分かってくれて安心」「職員が代わっても、問題なくできた」との声をもらった。他にも、「スマホで困ったら、職員の顔を思い出す」などの声をたくさんもらった。
また、ネガティブな入居者は減った。中には食堂でコミュニティブログを広げ、談笑する姿や、スマートフォンを片手に「ブログに掲載して」と来る入居者も増えた。コミュニティブログ閲覧件数は1日平均6件増えた。コミュニティブログ更新件数は、月4.6件増えた。

■考察

コロナ禍で人と人とのコミュニケーションが疎遠になっており、スマートフォンは入居者と家族・友人を結ぶツールとして重要度は増している。遠くのショップに行かなくても、教えてくれる子供・孫が居なくても、コミュニティに行けば解決できると感じてもらい、スマホ難民を一人でも多く救済できればと考える。

■今後の課題

スマートフォンを使えるようになると、今後問い合わせのレベルも上がってくることが予測される。どこまで期待に応えるか、どこから先をショップに頼るか線引きが必要と考える。

ようこそ松山エデンの園へ ～介護居室直接入居受入れの取り組み～

松山エデンの園 ケアサービス課・運営管理課

○磯崎啓太／館林 藍

■はじめに

松山エデンの園の介護居室の入居率は住み替え対象者が少ないこともあり、ここ10年低迷している。2022年度期首の介護居室の入居率は57.1%であった。2007年度より断続的に介護居室への直接入居（以下：直入）はあるものの、介護居室系の職員は信頼関係を一から構築する必要があり直入への抵抗感があった。また、入居前に収集する情報は人によってバラつきがあり入居が決まるまでの流れや詳細がわかりにくいといった声が挙がった。そのため介護居室の入居率の向上・受入れのシステム構築を課題としてケアサービス課介護居室係（以下：ケアサ）と運営管理課募集係（以下：募集）が連携をとり、課題解決のために取り組んだ。

■目的

入居率の向上やスムーズな直入受入れのため、各課の役割分担を明確にして2022年度介護居室直入を6件獲得する。

■方法

①課題の洗い出し、②各課の役割分担の明確化、③情報収集シートの作成、④介護士・看護師・募集の3名体制による入居前面談、⑤多職種による受入れ前カンファレンスの実施
<倫理的配慮>本研究には個人を特定できる情報は一切含まれていない。

■結果

①課題管理表を作成し、課題の洗い出し・対策方法の決定ができた。②課題管理表の作成により各課の役割分担を明確にすることができた。③情報収集シートも従来の基本的項目のみの書式から、生活歴の項目を増やした。④訪問で行うことが多い入居前面談も日程を調整して介護士・看護師・募集で実施することで入居検討者や担当ケアマネジャーからきめ細かい情報収集に繋がられた。⑤多職種による受入れ前カンファレンスでは、必要事項がもれなく確認できるのでお互いにフォローができ連携が強化された。それらの結果、直入の目標6件を達成し、住替え4件も含め入居率が11.4%増加した。2022年度3月1日現在の入居率は68.5%まで上がった。

■考察

情報収集シートは、ケアサが知っておきたいと考える項目が多すぎたため、実際の面談では全項目を聞けないこともあった。面談時の入居検討者の体力なども考慮して、効率的な情報収集のために項目・聞き取り対象者など、定期的な内容の見直しが必要と考える。また、ケアサ職員が「入居募集は募集係がするもの…」から「自分達も募集活動に参画している」と意識が変わったことで理想的な連携と目標達成に繋がったと考える。

■結論

今回、ケアサと募集が連携したことで、不足していた情報や直入受入れまでの動きを互いに知ることができた。今後は食事サービス課含め全課が一丸となり、スムーズな住み替えに加え、積極的な直入受入れによって入居率の安定を図りたい。



ヒヤリに対する意識を変える ～ヒヤリは「ありがとう」～

神戸〈ゆうゆうの里〉事務管理課 募集担当

○丸川美矢子

■目的

2021年度のヒヤリハット報告件数が神戸施設では全7施設中最下位であった。特に事務管理課からの提出は目標50件に対して報告24件（うち募集8件）。2022年度は募集職員が事故ゼロ委員となったことをきっかけに、ヒヤリを報告することの重要性や、ヒヤリに対する感度を高め、加えて総務経理職員にも今まで以上に協力を仰ぎ、事務管理課としてのヒヤリ報告件数アップを目指す。

■方法

取り組み期間：2022年4月～

仮説：募集と総務経理、それぞれ月に3件以上はヒヤリが起きているという仮説の元、2022年度の報告目標件数を70件とした。まずは前期で40件を目指す。

- ①ヒヤリを提出することはミスしたことを責めるためではなく、重大事故につながることを埋もれないようにするため、という意識啓発を図った。
- ②ケアカルテの入力方法で分からない点を事故ゼロ委員会で教えてもらい、その内容を募集に持ち帰って共有した。
- ③ケアカルテの入力ができない職員や、業務多忙で入力時間が取れない職員も気軽に提出できるように手書きの用紙を配り、代理入力する体制を取った。
- ④事務所と募集は場所が離れているため、事務所の方が用紙提出しやすいように「事務所専用」のクリアファイルを用意した。
- ⑤4～7月に報告されたヒヤリを全件印刷してファイルに綴じ、回覧して、全員がヒヤリ報告の内容に目を通せるようにした。

倫理的配慮：本研究には個人を特定できる情報は一切含まれていない。

■結果

- ・今までヒヤリを提出できなかった職員から、紙ベースでの報告が上がるようになった。
- ・募集内で小さなミスが起きた時に、ヒヤリを書こうと声掛けをしあうようになった。
- ・4月～7月末までで77件のヒヤリハット報告があり、目標を達成した。募集は58件の報告があり、募集内でのヒヤリへの意識が少しずつ高まってきた。
- ・ヒヤリの内容を集計し、一番ヒヤリが多かった来客準備に関するミスを減らすため、チェックリストを作成。また、ヒヤリ全77件を事務管理課全員に回覧した。

■考察

ヒヤリを提出するのは「事故の一步手前のような大きなミスするとき」といった意識から、小さなミスであってもどんどん共有していこうという、ヒヤリ提出のハードルが下がったことも大きな要因であると考えられる。また、ミスを責めるためではなく、自分が経験したヒヤリを他の人に共有することは、職場内皆のためになることであり、提出してくれて「ありがとう」という雰囲気づくりが進んだことも良かった。

■結論

募集と総務経理それぞれ月に3件は起きているだろうと仮説を立てたが、実際にはそれ以上のヒヤリが起きていた。ヒヤリを提出するための環境を整えたことで、ひとりひとりの意識が向上し、4ヵ月で当初の年間目標を達成することができた。そのため、更に高い目標を再設定した（年間70件→110件に）。また相乗効果で入居者相談件数も増えている（2021年度4件、2022年4-7月の4ヵ月で20件）。4月から7月の取り組みにおいて、ヒヤリ報告の声掛けをこまめにしていたので報告数が多くなったが、8月は減少傾向が見られた。ヒヤリが定着していないため、感度を高める取り組みをしていきたい。

ピンチを経験して Teppan を知る ～コロナ禍を経験して見えたこと～

浦安エデンの園 入居者募集センター

○田代美和子／吉田智美

■はじめに

浦安エデンの園は元気なうちに入居する有料老人ホームである。入居者募集センターの職員は高齢期の住まいの一つとしてエデンの園が選ばれるよう、日々入居募集活動に取り組んでいる。新型コロナウイルスが世界規模で蔓延してから日常は大きく変化した。浦安エデンの園でも入居者の園内生活や余暇活動の制限が長期に渡り、当たり前に行っていた入居募集活動もかつてないほどのピンチに陥った。その結果は入居契約数に直結し、コロナ禍が始まった2020年度は前年比45.4%減となったため、コロナ禍が続くであろう2年目に何とかしなければと取り組んだ結果、翌年度には入居契約数が増加していた。

■目的

コロナ禍での活動を振り返り、今後ピンチがあっても結果（入居契約数）に繋がる“Teppanの入居募集活動とは何か？”を検証する。

■方法

コロナ禍が始まった前後2年間を対象期間とし、資料請求件数やイベント参加者数、待機登録者数を比較し、エデンの園への関心度や効果的だった募集活動を洗い出した。
倫理的配慮：本発表では個人情報特定されないよう統計的なデータを使用した。

■結果

資料請求件数はコロナ禍前と比べ203%増加、唯一活動できた個別見学では開催時期に制限があったにも関わらず、コロナ禍前と同等の人数が参加。
また、待機登録者数も166%増加していたことが分かった。

■考察

入居契約数が下がった2020年度を振り返ると、在宅時間が多くなった方向けに新聞広告の見直しやホームページの更新回数を増やし、認知度向上にウェイトを置いた結果が資料請求件数に繋がったと考えられる。
また、「個別見学」は感染対策を工夫したことで、コロナ禍であっても例年とほぼ同等の参加者数となり、待機登録者数の増加に繋がったと推測される。

■結論

まず浦安エデンの園に興味や関心をもってもらい、直接来て魅力を知ってもらうことが大事であり、今回の検証で“知ってもらう・来てもらう”つまり「個別見学」こそが浦安エデンの園のTeppanの入居募集活動であることが分かった。
そして“セールスマン”ではなく“入居相談員”として「検討者一人ひとりに寄り添い、その方にとってベストな答えをともに探す」ことが何よりも大切だと再認識した。



コロナ禍におけるテレワークの実用性について

藤沢エデンの園一番館 運営管理課
○古野里枝／平田雄亮／宮内 誠

■はじめに

コロナ禍において、感染症対策のため長期出勤停止となるケースがあるが、事務職においては、請求業務・月次決算・給与計算等の月次処理遅延リスクの要因となり得る。遅延なく処理を行うことは当該職員以外の負担増を意味しており、一過性ではあるものの残された職員の負担軽減策が課題となる。

■目的

BCP（事業継続計画）の考え方に基づき、出勤停止者発生時の事務処理について、業務調整の予測と準備を行うとともに、テレワークの実用性及び職員の負荷軽減策としての効果検証を目的とする。

■方法

- ・データ収集方法
在宅勤務者がテレワークを行ったときの出勤者にかかる負担時間と、テレワークを行わずすべての業務を出勤者が代わりに行った負担時間の比較
 - (1) 対象業務の抽出：期日がある業務、データやシステムが自宅で使用可能な業務
 - (2) 施設内で仮想テレワークを実施：在宅で準備可能なデバイスや書類のみを使用
 - (3) チェックシートを用い実施内容を確認、集計：使用備品、システム、在宅勤務者と補助を行った出勤者の各々実施業務内容と所要時間、振り返り
- ・倫理的配慮
当該研究に入居者・利用者は登場せず、また職員の個人情報についての取り扱いもない。

■結果

在宅で使用不可なシステムがあり、テレワークが難しい業務が明らかとなった。しかしエクセル等の表計算ソフトを使用した業務等は、出勤停止者発生時の業務遂行の手法としてテレワークは有効であった。また、業務によっては最大76%負荷軽減となった。システム使用不可の業務はZOOMの使用により対応可能な業務もあった。

■考察

この結果から今後根本的な対策としては、ジョブローテーションにより担当者以外の職員も業務遂行可能な体制を作ることが望ましいが、短期的対策としてZOOMを使用し、出勤者が業務を代行することが可能であった。またテレワークをスムーズに行うために在宅勤務者が行う業務また必要書類などのマニュアルの整備が必要になる。同時に書類のデータ化を進めていく必要がある。

■結論

テレワークは遅延リスクに対する有効な手段であることは分かった。今後、対象業務の拡大を行いテレワークのマニュアル化、システム環境整備による効率化を進め、出勤者の負担軽減や遅延防止の強化を図っていく。

すっきり見やすい職場環境を目指そう ～写真と表を見て時間短縮への道へ～

浜松〈ゆうゆうの里〉食事サービス課

○齋藤達哉／片桐華帆

■目的

食事サービス課の業務で職員が食器出しをする時に、使用したい食器の場所が分からず、食器棚の扉の開け閉めを何度も行う場面を時々見かけた。また食品庫の食材を取りに行く際も、どの棚に何があるのか分かりづらく探すのに時間がかかっている姿が見受けられた。そこで職場を整理整頓して作業時間を短縮することと、すっきり見やすい職場で全員が気持ちよく仕事のできる環境にすることを目的とした。

■方法

〈仮説〉

- ①食器の収納場所が分かれば、扉の開閉が一回で済み、時間の短縮に繋がるのではないか。
- ②厨房内や厨房外の食器の収納場所を工夫すれば、作業が楽になるのではないか。
- ③食品庫に保管してある食材を棚ごとに色分けすれば、使いたい食材をすぐに用意できるようになるのではないか。

〈期間〉

2022年4月～2022年9月

・倫理的配慮：本研究には個人を特定できる情報は一切含まれていない。

〈方法〉

- ①食器の写真撮影を行い、ラミネート加工をした名札をマグネットで食器棚に貼り、一目でどの食器がどこに入っているか、扉の開け閉めを行わなくても分かるようにする。
- ②盛り付け作業に近い場所へ、使用頻度の高い食器を持ってくる。
- ③食品庫に保管してある食材の棚に何があるのかをリスト化し、棚をマグネットで色分けしリスト表を貼っておくことで、使いたい食材をすぐに準備できるようにする。

〈検証方法〉

- ・食事サービス課職員全員（23名）にアンケートを実施し、以前と比較してどのように変わったのかを調査する。
- ・取り組み前後の作業時間を比較し、どのくらい時間短縮に繋がったのかをまとめる。
- ・食器出し担当以外の職員に作業がしやすくなったか聞き取りを行う。

■結果

- ・アンケートの結果、以前より食器の位置が見やすく良くなったという回答が95%だった。残りの5%の回答には、以前とあまり変わらず似た食器をまとめて収納するなど食器の片付け方にも一工夫必要だという意見があった。
- ・写真付きマグネットの貼りつけを行ったことで、食器出しの作業時間は約45分から約40分に縮まった。
- ・3分以上の時間を要することもあった食材を取りに行く時間は、約30秒に短縮された。

■考察

- ・食器をまとめ写真や名前を貼ったことで、片付けや食器出しがしやすくなり、高齢化の進んでいる現在の食事サービス課にとって楽に作業できる環境になったと考えられる。また食品庫を整備したことで作業効率が向上し、その時間をより丁寧な盛り付けや確認作業に充てることができている。また、提供間違いも減少しており、入居者の満足度の向上にも繋がったと考えられる。

■結論

- ・整理整頓された働きやすい職場環境にしていくことで、入居者や働く職員の満足度を向上させることができた。



朝食時における配膳ミスの改善

松戸ニッセイエデンの園 食事サービス課
○安原庸司／土屋将太

■はじめに

朝食での配膳ミスが多く発生しているという認識はあったが、具体的な現状分析に至っていなかった。そのためスタッフへの注意喚起にも説得力が弱い状況であった。そこで、事故傾向の分析を行い、配膳ミスの情報共有を行うとともに、特に多発する「乗せ忘れ・乗せ間違い」にフォーカスした改善策の導入を進めた。

■目的

月に10件程度発生する食事配膳のミスを、業務改善により0件とする。

■方法

- ・過去1年分（2021年7月～2022年6月）のインシデント・アクシデントレポートを集計し、傾向を調べる。
- ・職員全員に配膳ミスが多発するケースの共有を行う。
- ・職員の作業導線、作業工程を見直す。
- ・食札を見直し表記を共通の認識になるようにわかりやすく統一する。
- ・検品を担当する調理師の意識・理解力を深める。
- ・倫理的配慮：個人が特定できないように配慮した。

■結果

過去1年分の配膳ミスを集計した結果、全体のインシデント131件に対して、朝食時のインシデントは71件（54.2%）、発生場所に関してはケア・クリニック配膳で87.3%を占め、項目別で見ると乗せ忘れ・乗せ間違いで71.9%という結果であった。

配膳ミスの傾向で多かった項目に関して職員への共有を行った。また配膳車搭載時の一方通行化など作業導線の見直し、作業中での引継ぎなど無駄な工程の削除、食札の表記の統一化などの改善活動を実施した。結果として朝食時における「乗せ忘れ・乗せ間違い」は取り組み前の平均6件／月に比べ平均4件／月に改善された。

■考察

動線の改善、無駄な工程を無くす、食札の表記改善により「乗せ忘れ・乗せ間違い」を防ぐことができたと考えられる。また、配膳ミスが多く発生するケースを周知したことで、パートを含む職員全員の意識が高まると共に、改善策導入について積極的な協力を得ることができた。「情報共有＋改善活動」により職場の機能が高まったと考えられる。

■結論

配膳ミスの傾向を分析し、導線・工程を見直すことで朝食時の「乗せ忘れ・乗せ間違い」に関するインシデントは改善された。この成功体験により職場の機能は高まり、改善を継続する基盤を作ることができた。朝食担当特有の人員が少ない、高齢パート職員が多いという特徴を踏まえて、SDCAサイクルを継続して行き、配膳インシデント0件を目指していく。

検食の質を向上させるために ～検食の役割・対応の見える化～

横浜エデンの園 サービス向上委員会

○大西栄幸／竹本絵理／上村直人／池田健人／富安 章

■はじめに

「健康増進法に基づく給食施設の栄養管理に関する手引き」に、検食の目的は利用者の立場に立って量・味・温度等が適切かを確認し結果を記録することとあるが、サービス向上委員会の中で「検食者によって検食の仕方にムラ」があることがわかった。

■目的

「調理者」と「検食者」の認識の違いを明確にし、対策を検討・実施することで検食の質を向上させる。

■方法

〈対象者〉 検食に携わる職員 41 名（調理者 5 名、検食者 36 名）

〈方法〉 ①調理者が、検食者へ協力して欲しい内容（コメント記入等）の意見聴取

②検食者へ検食に関するアンケート（目的・コメント記入等）を実施

③①②から対策実施

〈期間〉 2022 年 7 月～2022 年 12 月（6 ヶ月）

〈倫理的配慮〉 本研究は、対象者へ研究の内容を説明し同意を得て実施した。

■結果

方法①：検食者に具体的に協力してほしい内容（コメント・対応等）が明確になった。

方法②：検食に際し「目的の明確化・検食から調理者が対応した事例・記入方法」を知りたいという検食者の要望が明らかになった。

方法③：「検食簿記入マニュアル」、「検食を活かした改善事例」を作成した。「検食簿記入マニュアル」は、検食者全員へ配布した。検食簿に「検食簿記入マニュアル」、「検食を活かした改善事例」を挟み、検食者が検食時に確認できるようにした。

■考察

考察①：「調理者」、「検食者」、双方の視点で問題解決する「検食簿記入マニュアル」を作成したことで、検食者が検食の役割を理解し検食に取り組める。この結果、検食の質が向上するのではないか。

考察②：検食者が、「検食を活かした改善事例」を知ること、検食の必要性を実感でき、モチベーションが向上する。この結果、検食の質が向上するのではないか。

■まとめ

方法①②から、「調理者」と「検食者」の認識の違いを明確にし、方法③で「検食簿記入マニュアル」、「検食を活かした改善事例」を作成したことで、検食の役割・対応が見える化された。今後、目的である「検食の質の向上」に繋がったかを検証する。



大阪〈ゆうゆうの里〉食事総選挙 ～入居者が選ぶ、No.1メニューとは？～

大阪〈ゆうゆうの里〉

食事サービス課 ○宅見真弓／丹羽悠佳子

生活サービス課コミュニティ 門田拓也／萩原ひとみ

■目的

食堂の喫食数を増やすため、生活サービス課と共同で新しいイベントを企画した。入居者と職員に好きなメニューを選んで投票してもらい、さらに1位に選ばれたメニューを実際に食堂で提供する「食事総選挙」なら、皆に楽しみながら参加でき食数アップにもつながるのではないだろうかと考えた。

■方法

(1) 入居者と職員が投票を行う食事総選挙を4回実施した。

| | | | |
|----------------|--------------|-------|----------|
| 「カレー総選挙」投票期間 | : 5月1日～5日 | 献立実施日 | : 6月7日 |
| 「うどん総選挙」投票期間 | : 6月24日～30日 | 献立実施日 | : 7月19日 |
| 「オムライス総選挙」投票期間 | : 8月27日～9月3日 | 献立実施日 | : 9月23日 |
| 「B級グルメ総選挙」投票期間 | : 10月1日 | 献立実施日 | : 10月30日 |

(2) 投票方法

コミュニティが作成したポスターを投票日の1週間前に提示し予告を行った。

3階エレベーターホールに投票場を設置し、選んだ料理にシールを貼って投票する方法を採用した。

(3) 投票で1番になったメニューを献立に反映し、献立提供日は結果発表とともにポスターにて掲示した。

倫理的配慮：倫理的配慮に関して、本研究は個人情報等を含まない。

■結果

| | | | | | |
|-----------|-----------|-----|----------|------|-----------|
| ・カレー総選挙 | 総投票数 69 票 | 1 位 | ビーフカレー | 43 票 | 喫食数 105 食 |
| ・うどん総選挙 | 総投票数 53 票 | 1 位 | 稲庭うどん | 24 票 | 喫食数 94 食 |
| ・オムライス総選挙 | 総投票数 45 票 | 1 位 | デミグラスソース | 24 票 | 喫食数 91 食 |
| ・B級グルメ総選挙 | 総投票数 68 票 | 1 位 | 富士宮やきそば | 27 票 | 喫食数 88 食 |

■考察

食事総選挙は入居者に楽しんで参加してもらうことができた。食事総選挙で選ばれたメニューは昼食の平均数 80 食をすべて上回る食数となった。また選ばれないであろうと予想していたメニューが総選挙で選ばれるという驚きもあった。今回の取り組みを通して、入居者自身が献立の選定に参加でき、普段食事を予約しない方も食堂に足を運ぶきっかけになり、次回の企画を楽しみにする声もあった。

■結論

今回の企画では大幅な食数アップにつながらなかった。一方で、食堂の献立に興味をもってもらうきっかけとなった。入居者との会話も増え、コミュニケーションツールの一つとなった。今回コミュニティと協力したことで、幅広く入居者に企画の宣伝・予告をすることができた。今回の企画を通して入居者の食事の楽しみを作ることができたと考える。今後はこれを継続し、里の推しメニューを作っていきたい。

穏やかに過ごせる時間の実現

明日見らいふ南大沢 居室サービス課
○川上祐介／稲本章人

■はじめに

明日見らいふ南大沢居室サービス課では一般棟の入居者の支援をしており私たちケアセンター係は居室での生活が一時的に困難になった方の支援をしている。入居者が抱える課題をどのように解決して、一般棟の居室から介護居室へ安心して住み替えられるか日々検討している。なお、当施設では一時介護室をケアセンターと呼ぶ。

■目的

本人が「やりたいことを続けられる生活の実現」を目指す。その人の真のニーズを理解・共有し、ケアを統一することでその人の求める生活の実現ができるのではないかと考えた。

■方法

本人の過去・現在の細かな生活動作・リズムを知り、真のニーズを理解していく。

(1) 対象者…Aさん 70歳代、要介護4、統合失調症、アルツハイマー型認知症

(2) 期間…2022年6月1日から2022年12月31日まで

(3) 個別介護計画立案からケアプラン反映までのサイクルで実施

- ① 個別介護計画立案
- ② 他部署との合同カンファレンス
- ③ 24時間シートの使用
- ④ 個別介護計画再立案
- ⑤ ケアプランに反映

(4) 倫理的配慮

研究対象者が特定できないよう配慮している。身元引受人へ説明し使用に際し同意を得た。

■結果

- ① 入居者への視点に変化が現れた。また記録からどのような環境や体調などが不安要因につながるか、部分的に導き出すことができた。
- ② 合同カンファレンスで出された情報において施設の共用部での様子がわかり、本人のやりたい行動は精神状態に影響するものではないことが分かった。
- ③ 不安になりやすい時間や影響を与えている事柄を把握することができた。
- ④ 他部署と協力し、所在確認・安否確認を行いAさんが自由に過ごすことができる個別介護計画を再立案し不安を軽減することができた。
- ⑤ 介護居室へ住み替え後も住み替え前と変わらぬ生活を続けることができた。

■考察

他部署職員との連携やこまめにカンファレンスを行うことで、本人の行動の意味を知り共有し対応を統一することで「本人がやりたいことが続けられる」支援に繋げることができるのではないかと考える。

■結論

個別介護計画や24時間シート等を使用することでケアセンター職員だけでは見えていなかったことを知ることができた。行動範囲の広い入居者の行動を観察するため、他部署と連携を図り多くの情報を知ることができた。生活拠点が変更した際にもケアの統一を図り「やりたいことが続けられる生活の実現」を施設全体で目指していきたい。



認知症勉強会

～入居者と一緒に学んで行く～

湯河原〈ゆうゆうの里〉生活サービス課コミュニティ

○宇留野勝彦／石橋巖雄

■目的

入居者から施設内で認知症の方が見受けられ、自分自身もいつ認知症になるか分からない。今のうちに認知症について知識を深めたいという要望と、職員だけでなく入居者も認知症を知りたいという意向を受け、1年間をかけ「勉強会」を開き、入居者と一緒に学んでいくこととした。今回は、その1年間の報告と勉強会後に取り組みの報告となる。

■方法

1. 2021年3月～2022年2月、午前、午後計24回の認知症勉強会を実施
2. NHK福祉ビデオライブラリーより認知症に関するDVDをレンタル視聴後アンケート実施
3. 脳活性化運動の実施
4. 最終回は、認知症について自由討論会を行いアンケートにて理解度と勉強会に対する満足度をはかる。

倫理的配慮：収集したデータ、アンケートは個人が特定できないよう配慮した。

■結果

勉強会はDVDを視聴後、認知症の予防として「脳活性化体操」を行う。月一回、午前、午後と計24回行い、77名の参加となる。勉強会最終回には、2回目から11回目までのアンケート214枚の感想に書かれた質問を「認知症になった時の介護」「認知症と思われる方への対応」「自分自身が認知症になっているのではないか」「職員の対応」の4項目に分類、項目ごとに施設の対応の説明を行う。その後認知症について自由討論を行った。最終回後のアンケートで認知症に対する理解度と、勉強会に対する満足度をはかった。

■考察

アンケートによるDVDに対しての感想は、9割の方が参考になったと答えた。最終回後のアンケートでは、「その人に合った援助をしてくださるので安心しました。」「お話には思い当たる節もところどころあり気を付けたい。」「職員には何はともあれ相談する。」「里に暮らして安心感があることに感謝する。」などの、認知症に対する理解が深まったことなどの意見が聞かれた反面、「認知症の進行を遅らせる対策など具体的なことが聞けなかった。」という意見も聞かれ、認知症予防に対する期待が伺えた。

■結論

認知症への理解を深めたと同時に、もしもの時の施設の対応が参加者へ浸透し安心してもらうことができた。そして認知症予防への対策として、2022年9月より、みんなで楽しくコグニサイズを開始した。それと同時に、コミュニティが企画する様々な行事を通じて皆様の生活の活性化をはかっていく。

音楽療法を用いたリラクゼーション

浜名湖エデンの園 ケアサービス課

○大屋敦史

■目的

コロナ禍において入居者へ感染リスクを抑え何か提供できるものはないかと考えた時に、音楽療法を用いたリラクゼーションを提供し様々な制限によるストレスへの緩和を図れないかと今回の研究内容を考えた。その際にどのような行動変容が見られるのかも評価を行い、良い効果が得られるのならば今後の入居者の支援にも活かしていきたいと考える。

またその取り組み方法が職員の新たな業務負担にならないよう、音楽療法が一つの支援に繋がるよう計画した。

■方法

- ① 対象者へ2022/7/1-2022/7/31の期間にフロアで受動的音楽療法用に作成したCDを用いて実施。
- ② 評価方法には長谷川式スケール（以下HDSR）と音楽行動チェックリスト（以下MCLS）の2点を使用し、音楽療法実施前後において得点の比較を行う。
- ③ 職員より主観的意見も収集し評価を反映させる。

（対象入居者）

・A氏 90代 不眠がつづいている。認知症有（認知症の型は不明）。

・B氏 80代 アルツハイマー型認知症有。

（倫理的配慮）

本研究において目的や実施方法を本人および身元引受人に説明を行い同意が得られる。

得られた内容は本研究発表以外には使用しない他、個人が特定されるような情報が研究担当者以外に知られるこのとないように厳重に管理する。

■結果

- ・A氏はHDSRにおいて10点から15点へ、B氏は2点から5点へ共に上昇傾向が確認された。またMCLSにおいてはA氏が15点から21点へ、B氏が15点から16点と評価された。
- ・A氏B氏ともにポジティブな行動変容がみられていたと職員より意見があがる。

■考察

1名は実施期間中に薬の処方があり、不眠が改善し評価が向上した可能性も高いが、両名とも各種スケールの向上およびポジティブな行動変容がみられた。またマイナスな要素も発生していないところから本研究によるリラクゼーション効果と音楽療法による一定の効果があったのではないかと推測する。

同時に本実施期間が1か月と短期間であり、薬の影響やその時の環境、評価日の心身の状態等までは追跡ができず行動変容が音楽療法によるものなのかは断定できなかった。

それでも何かしらの行動変容が掴めたということは、「適切なCDを流す」という簡単な取り組みを行うことだけでも、音楽の力がより認知症予防の支援に繋げられる可能性が高いのではと本研究を通し考察する。

■結論

音楽療法による認知症患者への有効性は既に認められている。各種支援に音楽を取り入れることにより、入居者への新たな変化や可能性、アプローチ方法が見えてくる可能性があるかと結論付ける。本研究結果をもとに音楽の力も頼りながらよりよい認知症予防支援に繋げていきたい。



看取りケアに際して ～現場の介護職員ができること～

佐倉〈ゆうゆうの里〉ケアサービス課

○新田歩惟／岡野裕子／安納れの／藤田めぐみ

■はじめに

これまで佐倉施設では多くの入居者を看取り、また看取りに関する様々な研究や取り組みを行ってきた。医療面では診療所を中心に充実した対応がなされてきた。介護もそれに準じて行ってきたが、その時に対応する職員の個人の力量に頼る部分もあり、「看取りの際はこういう対応をする」といったスタンダードが十分定着している状態ではなかった。

■目的

2022年4月、ケアセンター内で4人の看取りケアが重なる状況になった。一度にこれほどまでの看取りを行ったことはなく、現場がやや混乱した。そこで、今までの解決の意味も兼ね、看取りケアがスムーズに実施できるように取り組みを行った。

■方法

- ・ 課題を解決する方法として①中心となって看取りケアを行うチームの結成、と、②対象者専用の看取りケアハンドブックを作成する、という方策を導き出した。
- ・ 6月3日、看取りケアの対象となったA様のケースについて、看取りケアチームを結成し、取り組みを開始。具体的なケア方法を整理し、情報を現場職員と共有、実際の看取りケアを実施した。同時に看取りケアに関する職員の意識啓蒙や教育も行うこととした。
- ・ 5月今後の看取りケアをよりよいものにしていくために、看取りケアについて、職員の年代別にアンケートを実施。
- ・ 6月アンケートの集計を行い、今後の改善点に繋げた。
計画作成担当者から情報収集、家族からの聞き取り、PEAP3日本版を基準としてA様の看取りケアハンドブックを作成しスタッフと共有、家族のグリーフケアを目的として職員による日誌を記録。
- ・ 8月看取りケアハンドブックに基づくケアが実施できたかどうか職員にアンケート調査を実施。
倫理的配慮:対象となったA様の家族に個人が特定されない旨を説明し、文書にて同意を得ている。

■結果

主体的に動くチームを結成したことで大きく2つの成果があった。ひとつは、A様に合わせた詳細な介護内容を記したハンドブックを作成したことにより、チームだけの取り組みではなく、複数の職員が関り、職員が統一したケアを行えるようになったこと。もうひとつは、職員日誌を作成し、家族に見てもらい、「皆さんによくしていただいたのですね。本当にありがとうございます」と介護内容の理解と、感謝の言葉をいただけたこと（グリーフケアにも繋がった）。

■考察

専門のチームを編成したこと。チーム中心にケアのスタンダードを「見える化」することによって、上記のような成果が出せることがわかった。

■結論

看取りケアについて、何をしたら良いのか不安に感じている職員もいたが、具体的でわかりやすいハンドブックを作成したことで、細かな部分まで統一したケアを行うことができた。コロナ禍、面会に来られず、家族の不安もあったと思うが、日誌を通じて看取りケアの様子を伝えることができ、グリーフケアの一助となったと考えられる。

コロナ禍で高齢者に及んだ影響と最新のフレイル対策



筑波大学人間系
教授 山田 実

本来、東京オリンピック・パラリンピックの開催で歓喜に沸くはずだった2020年、思いもよらない未知なるウイルスの登場が、世界を震撼させることになりました。基本的な感染対策として、いわゆる“3密回避（密閉、密集、密接の回避）”が呼び掛けられ、これまで経験したことのない自粛生活がスタートしました。これは同時に、『感染予防』と『フレイル対策』という相反する二つの大きな課題への挑戦の始まりになりました。

フレイル対策には、運動、栄養、社会参加という三つの要素の促進が重要と考えられています。ですが、感染予防を重視した自粛生活では、『身体活動』と『社会活動』が抑制されることになりました。長引く自粛生活によるこれら活動制限の持続は、筋力の低下や心の健康状態を阻害するなど、フレイル状態になる高齢者を増加させることになりました。いかなる状況下でも、身体活動と社会活動という二つの『活』を維持・促進することが、健康維持・フレイル対策に求められます。

本講演では、コロナ禍で高齢者に及んだ影響を整理するとともに、最新のエビデンスに基づくフレイル対策についてお話させていただきます。

略歴

神戸大学大学院医学系研究科にて学位取得後、2008年より京都大学大学院医学研究科助手、2010年同大学院助教、2014年筑波大学人間系准教授を経て、2019年同大学教授に就任。専門分野は老年学。日本老年療法学会副理事長、日本サルコペニア・フレイル学会理事、日本転倒予防学会理事、日本予防理学療法学会理事、日本老年医学会代議員、日本体力医学会評議員など。



日常生活の歩行計測による高齢者の自立支援サービス —テクノロジーを通じてフレイル予防の可能性を探る—



みずほりサーチ&
テクノロジーズ株式会社
調査役 渥美智之



みずほりサーチ&
テクノロジーズ株式会社
調査役 福島 遼

高齢者の健康状態の保持・増進やQOL維持において、健康診断や体力測定といった定期的な状態把握により、その結果に応じた対策を行うことは重要です。但し、健康診断は頻度が少なくフレイルの進行を予防するための介入が遅れてしまう、体力測定のデータはあくまで“計測を意識したデータ”であり、計測条件によって結果が変わってしまう、といったことが考えられます。日常生活の中で自然に計測した日々のデータから些細な変化に気づくことができれば、適切なタイミングで対策を講じることができるかもしれません。

私たちが開発する「テクテクダイアリー」では、施設で生活する高齢者の日常生活の歩行を自動で計測し、その推移を可視化します。施設の職員が用いることで高齢者の歩行速度や歩行頻度の低下といった変化への気づきを促し、職員同士の会話や高齢者との会話のきっかけを作ることにより、早期発見・早期対策につなげていくことを目指しています。

本講演では、〈ゆうゆうの里〉の施設で実施した上記サービスの実証実験で取り組んだ内容や得られた成果を発表します。